

花  
以  
花



花

はな

ひた

いかな



はじめに。

俳句と私の出会いは、かれこれ十四年前の平成五年に

太田邦武先生の俳句講座に入門させて戴いた時からでした。

電車を乗り継いで身延線の入山瀬駅までよく通いました。

富士文庫の吟行会で興津の清見寺に参りました折り、暖かい冬日の中に五百羅漢さんと並びまどろんで

「小春日や 五百羅漢になりすます」

とごく自然に句になりました。

先生は当時は未だ々々お元気でお上手な褒め言葉で、私達を御指導くださった、励まされたものです。

林の中のカラス瓜をいち早く見つけ、

「自然をよく見自分を確りと見つめて自分の言葉で作句するように」

と、また舌頭千転して人に伝えられる良い句にする必要性を説かれ  
懐かしく思い出されます。

出来る事なら十年タイムスリップさせてとお願いしたい心境です  
が、この上は天国で再びお目にかかり句会を開くのが夢です。

「逝きし師の選句の声や冬銀河」

「梅一輪句一筋の師でありし」

今は私の師を偲ぶ句となりました。

師の亡き後は句友仲間に恵まれ手探りで俳句を続けておりますが、  
一つの区切りとして纏めてみました。

ご笑覧戴ければ幸いです。

平成十九年五月吉日

富士市鈴川中町二十一の六

城所愛子



淡墨の雲を撮して花筏

春驟雨騒ぐ茶店のトタン屋根

大桜甲斐駒を背にお在します

ハイウエイ大きく跨ぐ春の虹

蛙の子足の先までストレッチ

チューリップ秘めごとのなき大欠伸

春光を細き目に溜む六地藏

亡き友と歩みし小径辛夷咲く

蓬摘む手籠に陽の香溢れけり

ラベンダー肺の奥まで染まりけり

パンジーを植えて薫りの風生るる

湯煙やガラス越しなる水芭蕉

文字摺草砂丘の風を揉むごとし

護摩焚きの煙りかけ含ふ春朧

つるし雛座しいる媼雛のごと

嫁ぐ娘のお点前見守る雛かな

呪いの痛いので飛んでけ揚羽蝶

石南花の坂に躓く富士やさし

墨色に煙る天城や走り梅雨

母の日や老いても母の京言葉

せせらぎを止めて老鶯西東

約束の花時計前 薔薇の昼

せせらぎに育らし芥の香り摘む

たわわなる青梅に恵みの雨きたる

夕光や宗旦むくげに白き風

灯台の汽笛高鳴る梅雨ぐもり

足もとの梅雨を払いぬ海難忌

川音に老鶯聞くや旅寝かな

老鶯の欲しいままなる座禪石

降りしきる花アカシヤの香を掃きぬ

航跡の円鮮やかや春渚

摘む指に香り残せし路の臺

もてなさる味噌饅頭や若葉風

咲き満てる花に集ふや車椅子

幾百の顔のほころぶ花の昼

もみじ手に忘れて振る手花の船

讚美歌の窓辺を打つや花の舞

無人店少しく残す路の東

旅果ての島の土産や椿雛

満天星の小鈴を振るふ朝の風

咲きさかり棚に揃ふやダルマ藤

藤房に触れる風あり艶めけり

眼裏に藤の花房揺れてをり

笹餅の笹の香りや風炉点前

夕べの陽くずるごとし緋の牡丹

樟若葉神宿りたる子の寝顔

虫于しや明女を惚ぶ小抽斗

背なの子は祇園囃子と子守唄

歸陰の塵一つ無き神の庭

新緑を分けてケールブル降りとり

背伸びしてブーゲンビリアの海を恋ふ

竹林の風すき通る野天風呂

万緑やフルー ト響く丘の句碑

ハンドベル梅雨の晴れ間の祝婚歌

母病みて紫陽花色を深めけり

ねんごろに母の爪切る梅雨晴れ間

意識なき友を見舞ふや梅雨茫々

紫陽花の雨に重たき葬の列

鳥賊釣りの灯一直線海を切る

波飛沫かけ上がり行く夏帽子

浴衣縫ふ亡母浮かび来る鯨尺

腰上げの七寸下ろす子の浴衣

姉逝けり塔婆に沁みる深緑

空梅雨や俄か農婦の厚化粧

肩先に日焼の白ふ終電車

ロッキーの風逸品の夏料理

パーティーの果ててコロラド月涼し

ロッキーの夏に千草の咲き満てり

台風過 稜線燃ゆる定山溪

思い出を浴衣にたたむ北の旅

夏蝶の出迎えくれし日本国

トンガ村指文字で買ふ夏帽子

愚痴いとつ宙にとばして夕端居

鰻屋の鯉まろまろと陽をかへす

竹林の風透き通る露天風呂

若竹の迫り来る山吐月峰

ハレルヤの樂譜飛び入る夏の蝶

夜の秋仄かに匂ふ宮尾本

お手玉の色合わせする夜の秋

声を出し読む万葉歌 夜の秋

ワッフルのレシビ片手に夜の秋

海鳴りの岬を遠くスカシ百合

そそり立つ岩にしがみし薄紅葉

吾亦紅主役に生ける志野の壺

月光を伴に飲み干す吟醸酒

秋の灯の甲板上の宴かな

せせらぎの思い出映す紅葉燃ゆ

湧水に声を透かして忍野秋

コスモスの面影残し忍野昏る

背のびして柿つるす母卒寿越ゆ

熟れ柿やモンキーウオーク坂下る

いわし雲ぐぐつと掴み太極拳

氏神の祭舞台や神は留守

神域の灯明灯す一位の実

菊日和受賞の栄を分かち合ふ

富士を背の三三九度や冬日晴れ

熟れ柿や誓子の句碑をまのあたり

富士晴れて瑞祥の菊薫りけり

着膨れてときめきとりぬ流星群

受験子のめくる暦の重さかな

赤トンボ地蔵の帽子飾りけり

月光と語らふ地蔵の影長し

落葉焚き芋焼きし日の遠のけり

子等帰り風鈴さわぐ日暮れ刻

道の駅主婦の目となる葺かな

苔むせる裳越の塔や紅葉舞ふ

紅葉狩浄めの一杓硫黄泉

山の幸溢る釜めし冬ぬくし

信玄の狼煙の跡や紅葉燃ゆ

ハンカチに紅葉拾いぬ病む友に

コーラスの生活を忘れ秋立ちぬ

シーサーの面巡らす台風過

蟋蟀や「肩させ裾させ」之母の声

秋晴れて百寿の峰を越えにけり

三井寺の梵鐘の音や紅葉冷

旅終えて普段のくらし大根煮る

こぼれ咲く百寿記念の水引草

愛子内親王誕生祝句

寿ぎの声浦々に明けの春

雁渡る百寿の声や空に満つ

菊酒を含み百寿の母笑ふ

共に生き屠蘇賜りぬ五十年

八重山の入り日惜しみぬ初日記

滝壺に幻の帯冬の虹

山嶺を黄金に染めし初日の出

吾が齡犬の齡や日向ぼこ

影といへ寒夜を一人更かしをり

寒夕焼身に纏いつつウオーキング

老犬と語らふ手話や冬うらら

砂浜に声とからして寒鴉

落つるもの落とし安らぐ冬銀杏

軒落つる雪静寂を破りけり

軒つらら背比べする山の宿

冬天を切る一筋の飛行雲

カルチャーの包丁さばきや冬うらら

末黒野の黙深くあり夕鴉

春疾風迂回路ばかり工事灯

臘梅や義兄の忌日の近くなり

雪と背にもたれ含いたる六地藏

鶯の初音を聞くや歩巾伸ぶ

梅一輪句一筋の師でありし

句仲間と出合ふ坂道梅日和

白梅の眩しさすかし湖の碧

枯る々として香り残れる梅一輪

逝きし師の選句の声や冬銀河

キャンドルの焰を揺らし聖誕歌

松籟の音のみ耳に初茶会

寄せ鍋と云ふも二人の夕餉かな

ゴスベルの声の漲る聖夜かな

自販機の寒夜に響く「ありがとう」

朝富士に靡く芒の波静か

白妙の富士に地蔵の語りかけ

「千の風」遺族安らぐ冬の星

山茶花の紅をこぼして老いの家

大椀の舌にとろけしぶり大根

とりどりの梅ふくよかやブチパーティー

雪柳カーブミラーを揺らしけり

漆黒の空の便りや細雪

開運のたるま弁当温め酒

神殿のまき砂眩し冬紅葉

紅型を纏いて冬日の首里巡り